

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

デイスチャージ(放電) 第3章



文・写真/レイラ・アズナブル イラスト/エーカ

今までのあらすじ

全寮制の男子校で、僕、夏木涼(なつき りょう)と同室となった林野柊(はやしの しゅう)は、異世界への旅を繰り返す異邦人だった。しかし、その事を僕が知った高校二年の晩秋、柊は僕を残し次の世界へと旅立った。それから五年半の時間が過ぎ、大学卒業間際、僕は彼と再会した。そして、柊が次の世界へと旅立つまで、僕らは共に暮らしていた。

* * * *

服を着たまま川に入り、何かを追いかけてはしゃぐ柊を、川原に腰を下ろしたまま、僕は見ていた。二年目の今年、山の中で、柊は毎日違う表情を見せた。初めて会った高校生の頃、柊はいつでもどこか遠くを見ていた。誰にも関わらず、関心

を持たせず、いつも柔らかな笑顔を見せていた。

今は、笑って、驚いて、不機嫌そうになり、怒り、僕に素の表情を見せている。毎日子供に戻っていく。あるいは年相応の顔を見せていく。その柎を作ったのは僕だ。そう思ってもいいだろうか？

その事に僕は誇りを感じていた。

彼は十六歳で旅を始めたと言っていた。だから、入学した時には、僕よりも何歳か年上だったはずだ。だが、二度目に出会った時には僕とあまり変わらないように感じた。僕は五年半待ったが、柎の旅はもつと短かったのではないだろうか。

川からずぶ濡れで上がってきた柎が、息をはずませながら、僕の隣に腰を下ろす。そして、「きみは毎日違うなあ」と言った。

「涼、それだけじゃない。きみは高校生の頃とも違うよ」

僕は川原に寝転びながら、柎の言葉を聞いて、同じ事を考えていたのかと驚いた。

「高校生の頃、涼はいつも大口をあけてバカみたいに笑って、仲間をひきつれて遊んでいた」

「バカで悪かったな」

「ああ。なんて能天気な奴だと思った」

「……」

「だけど、時々きみは振り返って、何かを探すような目をするんだ。どこかで見たなと思って、それが父だと気づいた」

「そんなくせが、あつただろうか？」

「きみの祖父が死んだと聞いたあと、何度か林の中で座っているきみをみつけた。ぼんやりとどこかを見ていた。その目は父そのものだった。丘の上で、父はいつもそんな目をしていた」

「そうだった。おじいを思い出してよく林に行っていた。柎に見られていたなんて、気づかなかつ

た。

「ノートを渡した後は、手がつけられなかった。泣いて。どなつて。本当にガキだった」

「……」

「今度会つたら、えらそうに命令ばかりしていた。…父…みたい。そして……」

柗の声を聞きながら、僕は眠くなつていた。たくさんの柗との思い出がくるくと落ちてきた。

川原の石も日差しも温かく、僕を包んだ。幸福つて温かいんだ。柗。あまりに大きな幸福に会うと、泣きたくなるんだ。きみは知っているか？

きみに伝えたい。温かい幸福に包まれたら、そのまま包まれていていいんだ。要らないなんて、言わなくていいんだ。目をさますと、柗も僕の横で丸くなつて寝ていた。

『ガキはお前だ』柗の寝顔を見ながら、そう思つた。

何度もだまされたあとで気がついた。うつすらと笑う事も、柔らかく力を抜く事も、柗のよろいだ。何度もそのよろいを外したと思い、何度も裏切られた。僕はどこまで柗に近づけたのだろう。

永遠に続くかのようなコテージでの夏の日々。

その冬も、同じコテージで僕らはすごした。柗は毎日のように庭に立ち、彼の故郷に似ているという雪景色の山々を見ていた。

「いつかきみと、きみの故郷の冬景色を見たいな」

繰り返しそう言う僕に、柗は何も答えず、不思議な微笑を作った。それは、柗が時おり見せるよろいに似ていた。

三月、僕は大学院を、柗は高校を卒業した。柗

が僕の世界に来て二年以上が過ぎた。僕達に、僕に、あとのくらい時間があるのだろうか。母から送られた卒業祝いの小切手を、僕は柘の分も送り返した。口座の残金を計算し、四月、義父からの送金も返却した。バイトも大分前に辞めた。多分残った金で、この世界を立つまで、ふたりで充分に暮らせるだろう。五月分を返したところで妹から連絡があつた。次に返却されたら、母が会いに来るそうだ。次回は受け取ると返事をした。

彼女から「なぜ就職をしないの」と、聞かれた。そんな事も彼らには知られているのかと腹が立った。「残された柘との時間を大切にしたいから」と、返事をした。妹は納得したが、うそだった。僕は柘を監視するために、就職もバイトも辞めたのだ。

七月。僕はコテージを二ヶ月間借りた。柘は嫌がった。僕はほとんど力づくで、柘を車に乗せた。コテージに落ち着き、外へと誘っても、柘はついて来なかった。だるそうに長いすに横になり、一日中、本を読んでいるふりをしていて。毎日ふたり、黙ったままでコテージの中ですごした。毎夜、柘の部屋の前に立ち、柘の寝息が聞こえてくるまで、僕は自分の部屋に戻る事ができなかった。

キラキラとした温かな光の中で、僕は探し物をしていた。なにかとても大事な物が、その僕のそばから立ち去って行く感じがして、手を伸ばしてつかまえた。つかんだ手が体ごと引つ張られて、目が覚めた。柘が振り返り、「なんだ、起きていたのか」と、言った。

気がつくくと、柘の上着のすそをつかんでいた。

「いや、今、目が覚めた」

寝不足が続ки、体がだるかった。

「朝食ができているよ。僕はもう済ませた」

ドアのところでそう言つて、柊は出て行つた。

僕のベッドのはしに、柊が座つていたような心配が残つていた。唇に不思議な違和感があつた。



イラスト／エーカ

テーブルにはひとり分のコーヒーとパン。柊が作つたスクランブルエッグ。簡単なサラダ。一日遅れで届く新聞をぼんやりと広げ、コーヒーを飲んだ。背中で柊が外へ出て行き、ドアを閉める音を聞いた。寝起きでなければもつと早く気づいただろう。遠く雷が鳴っている。その音を聞き、僕は初めて目を覚ました。新聞を投げ捨て、外へ出る。

なぜ、柊は寝ている僕を見ていた？ なぜ、僕の唇には柊の唇の感触が残っている？ 今日なんだ。柊は今日旅立つてしまう気だ。

大分前から、柊がひとりで行くつもりなのを感じていた。彼が雷雨の通り過ぎる度に、疲れていくのにも気づいていた。無理をして旅立つ自分を押さえ、僕との時間を延ばし、しかし、僕と一緒に居る事を拒んだ。彼はたくさんのうそをついていたが、たったひとつ、僕につかなかつたう

そがある。一度として一緒に行くとは言わなかった。

どこだ。柊はどこに行つた。まだ、それほど時間はずたつていないはずだった。木々の間に、柊の上着のすそがひるがえるのが見えた。あの方向は、あの日、ふたりで寝てしまった川原だ。走つた。認めない。さようならのキスなど、僕は認めない。

木々が途切れ、川原に立つて、川面を見つめる柊の後姿が見えた。両手でしっかりと自分を抱きしめていた。

「柊っ！」

だめだ。間に合わない。柊のまわりで空間が揺らぎだしているのが見えた。柊の体が揺れて、こちらを振り返つた。見えるはずが無いのに、柊の目の中に、苦痛にゆがんだ僕の顔が見えた。その顔に向かつて、僕は手を伸ばし走り続けた。

柊が、柊も、僕に向かつて走り出し、手を伸ばした。

指がからみ合つた瞬間、空間のゆがみが僕を包み、僕を揺さぶり、ふたりの手を引き離そうとした。僕はもう片方の手で柊の手首をつかみ、引き寄せた。柊も片手で僕の肩をつかみ、からだ指をほどきしっかりとつかみ直した。上下が、左右が、反転し、内と外がかき回され、骨がきしみ、息ができなくなる。おぼれる者が助けに来た者にしがみつこうように、僕は柊の胸にしがみついた。柊の両手がしっかりと僕の背中をだきしめている。柊のその両手の感触を確認しながら、僕は僕の意識が飛ばないようにした。今にも気を失い、柊の体から手をはなしそうになる。

柊の体から力が抜けて行き、僕もこれ以上はもたない…そう思った時、硬い地面に投げ出され、思わず柊の体から手を離れた。

きしむ体をだましながら周りを見た。近くに柊が倒れている。安心すると同時に、激しい怒りが僕を包んだ。息が整うよりも早く、よろめく足で柊に近寄った。まだ倒れたままの柊を抱き起こし、殴りつけた。

「ばかやろう！ なぜだ。なぜ、また置いて行くとする！」

怒りの興奮が過ぎた後、恐怖がよみがえった。またひとりになる。柊の周りの空間が揺らぎだした時、僕を襲った恐怖だ。体が震え、立っていられなくなつて、倒れたままの柊のそばにしゃがみこんだ。

「…ばかはきみだ」

倒れたままで、両腕に顔を伏せ、柊が言った。

「あそこはきみの世界じゃないか。家族だつて居る…。もう、きみは戻れないよ…」

「違うんだ、柊。……」

続く言葉を飲み込んだ。だが、柊に隠し事はできない。したくない。

「……違うんだ、柊。母に会った時、僕は何も感じなかった。怒りも、懐かしきも。…愛も。この人が、僕を産んだんだ。なるほどそうなのかと、僕は思っただけだった」

時々両手で自分の口を押さえて、泣かないようにした。全部言ってしまうなければ。今じゃなければ、もう言えないかもしれない。

「妹に会ったら、僕は言いたい事があつた。

『僕が兄さんだよ。いつだって、きみの力になる。困った事があつたらなんでも言つて欲しい』

でも、言えなかった。妹に会つて気がついた。

僕の助けなんか必要の無いほど、彼女は幸福に輝いていた。次に妹に会った時、彼女は僕に言ったよ。あのコテージで過ごした最初の夏だ。

『何か困った事があつたらいつでも言つて』

僕が言えなかった言葉を、彼女はあつさりと言にした。

『心配なんて、させておけばいいのよ。親なんだから』とも…。

家族として、家族の中で暮らしていた者だけが、言える言葉だ。生活の全てを彼らに依存しているながら、僕は彼らの中には入って行けなかった。僕の生活に彼らを入れたくなかった。僕は何度も自分と妹を比べた。その度に、僕は薄汚くてもじめだった。きみの言うとおりかもしれない。何度もそう考えた。僕はひねくれているんじゃないか？ 愛を知らない、心の冷たい人間じゃないのか？ でも、だめなんだ。僕の帰るところはあそこじゃない」

柊が僕のそばにやって来て、僕の頭に手を回した。

「なぜ、柊を必要としてはいけない？ 誰だって



そうじゃないのか？ 誰かと手をつなぎたい。それが、きみであつて、なぜいけない…。きみは僕を選んでくれた。僕にあのノートを渡した。たとえそれが、きみの父に似ているというだけか理由としても…」

「もう、いい。それ以上、言わなくていい。必要以上に自分を卑下する事はないよ。きみは僕に、充分すぎるほど、たくさんのお事をしてくれた。その事を僕は知ってるんだ。きみの中には愛が溢れている。そして、出口を求めていた。ただ、それがたまたま僕だったんだよ。あの時出会ってなければ、きっと僕じゃなかった」

柊が僕の頭を抱いて、自分の胸に抱き寄せた。

『違うよ、柊。たまたまじゃない』僕は心の中で答えた。『きつと、違う』

子供をあやすかのように、柊が僕の頭をなぜている。その癖をきみに教えたのは、きみの父親なのかな。僕は、その父親にまで嫉妬する。柊がまっすぐ前を向いたまま、自分に語りかけるように話す。

「…どんなに大事なものができても、置いて行かなくちゃいけない。だったら、好きにならなきゃ

いい。ずっと、そう思っていた。ばかやろうは僕だ。涼を置いて行けると思っていた。涼と一緒にいても、僕は大丈夫だと思っていた。…最後の最後で、僕は涼の手を取ってしまった」

ささやくように、柊が言う。

『そうだ、ばかはきみだ。今だって、苦しんでいる僕を見て、きみは僕を抱きしめた。きみだって誰かと手をつなぎたいんだ。きみだって、僕と手をつなぎたいんだ』

「柊。僕は僕の世界に持って行きたい物は無かったよ。だから、戻れなくてもいいんだ」

「きみはまだ知らないんだよ。僕にとって全てを置いて行くって事がどういう意味か。僕がきみと行くという事がどういう事か」

低い雲が切れて、太陽が見えるようになった。

山の中腹に僕らは居るようだ。どのくらいの高

さの山なのだろう。まばらな、不思議な形の背の高い植物の間から、ふもとの平地に、見た事の無い形の建物が点々と見えた。僕達の目の前の太陽から、その光がまっすぐに僕達に届く。スポットライトのように、僕らを照らしている。

「ずいぶんと低いなあ。朝日かな、夕日かな」と、柊がつぶやく。

「朝日さ！」と、僕。「新しい一日が始まるころだ！」

「きみはやつぱり、能天気な奴だ。新しい世界で生活を始めるつて、そんなに気楽なもんじゃないよ」ため息まじりに、柊が言う。

顔を伏せ、肩を震わせた僕に、また泣き出したのかと思つて、柊が覗き込む。僕が笑つているのに気づき、肩に回した手をはなす。

「柊、そんな事を言つたつて……。楽しそうだぜ。顔が笑つている」

ぎよつとしたように、柊が自分の顔に手を当てた。

「いや、新しい世界には、危険もあるんだ。警戒して、緊張して、不安で……」

そこで、言葉を切る。

「変だ。感じない。僕は楽しんでる」

僕が声を出して笑い始めたので、柊がむつとしたように立ち上がる。洋服についた泥をはたきながら、「まあ、いいさ。足手まといだけれど、しょうがない。面倒をみるさ。きみが無理やりついできちやつたんだからね」と、つぶやく。

僕は座つたまま、わざとゆつくりと答える。

「えーつ。きみが連れて来たんじゃないかあ」

柊が驚いたように振り返つた。

「涼はどうしてそうなんだ！ きみが追いかけて来たんじゃないか！ 言う事、やる事、支離滅裂だ！ その上、怒つたと思えば泣く、泣いたと

思えば笑う。つき合いきれないよ！」

そして、体中で怒ったまま歩いて行く。

『なあ、柊。よろいはどうしたんだ。あの柔らかな笑顔は』

「おおい、柊。やっぱり、朝日だよ。さつきよ
り、高い」

柊が振り返り、僕に向かって笑いながら手を
振った。

背の高い植物の、不思議な色と形の葉の間か
ら、朝日が射している。僕の世界の朝日とそつ
くりで、僕らの歩く先を照らしている。

終わり



写真ノレイラ・アズナブル